体育の楽しさを感じ、課題に向かって主体的に運動に取り組む子どもを目指して～表現運動の実践を通して～

魚沼市立広神東小学校
平賀　貴文（平成 23 年度）

＜主張＞
本実践の目的は、「表現運動」において子どもに課題に対して主体的に運動に取り組ませることで、体育の楽しさを感じさせることである。これまでの私の実践では、子どもは意欲的に運動に取り組むが、表現する動きに対して課題意識を持たせることに難しさがあった。そのため、本実践では子どもに課題意識を持たせるために、「教科横断的な単元構成」、「ＩＣＴ機器の効果的な活用や場の工夫」の２点を手立てとし、改善を行うことで、表現運動の苦手な子を含む多くの子どもたちが主体的に課題に向かって表現運動に取り組むことができると考える。結果の検証に当たっては、子どもの振り返りの記述、単元前後のアンケート、授業の映像や子どもたちの音声の記録などを基に判定した。本実践の子どもたちの様子、結果の検証から、子どもたちは課題に対して主体的に運動に取り組むことができ、体育の楽しさを感じることができていたことが分かった。

１【主題設定の理由】

小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説体育編の第１章総説には、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視し～」と示されており、生涯にわたってスポーツに親しむ資質の育成を図ることが体育授業では必要不可欠とされている。そのような資質の育成を図るには、体育の楽しさを感じ、運動を嫌いにさせないことが重要だと考える。

ここで、私の昨年度の１年生の表現遊びの実践を振り返ってみると、子どもたちは意欲的に表現遊びを行ったものの、表現する動きに対して課題意識を持たせることや、題材に対する「気持ちやイメージ」を「動き」に変化させていくところに課題が残った。さらに、低学年という発達段階だったために恥ずかしさもなく、即興的に動けたのではないかと感じる場面も多々あった。そこで、本実践では子どもたちが課題意識を持ち、主体的に動きを高めていく姿を目指す。また、体育の楽しさやみんなで課題に向かって主体的に取り組むことの良さを感じることができるように、子どもたちの意欲が増す単元構成の工夫やＩＣＴ機器の活用を通して、楽しく運動に取り組ませていく。それらを通して、生涯にわたってスポーツに親しむ資質の素地を形成していく。

２【子どもの実態】（６学年：男子９名、女子 12 名）

２１／２１名

	とても好き	好き	普通	あまり好きではない	好きではない
体育	10名 47.6%	7名 33.3%	4名 19.1%	0名 0%	0名 0%
表現	4名 19.1%	2名 9.5%	9名 42.8%	2名 9.5%	4名 19.1%

表１．単元前アンケート結果

単元前のアンケートによると、体育で体を動かすことは好きと肯定的に答える子どもが１７名（80.9%）と大半を占め、好きではないと否定的に回答する子どもは０名であった（表１）。授業の様子からも、楽しみながら運動に親しんでいる姿が見受けられる。ただ、事前アンケートで表現運動に対して尋ねてみたところ、「分からない」という声が聞かれ、表現運動自体に取り組んだ経験があまりないようであった。アンケート結果を見てみると、とても好き・好きと答えた子どもは６名と少なく、好きなのかどうかあまり分からないので普通と答えた子どもが９名、あまり好きではない・好きではないと答えた子どもが６名おり、その理由としては「恥ずかしいから」が多いことが分かった。合わせて、体育でどんな時に「楽しい」と感じるかも尋ねたところ、「運動ができるようになった時」、「競い合う時」、「勝った時」、「友達と一緒に運動した時」が過半数を超え、運動ができるようになったりすることや、友達と一緒に運動に親しんだりすることに楽しさを感じることが分かった。今回は、表現運動に対して経験が少ないが、友達と一緒に運動することには楽しさを感じる子どもの実態を踏まえ、全員が表現運動の楽しさを味わえる単元にしたいと考えた。

３【目指す子どもの姿】

友達と協力し、アイデアを出し合ったり、修正したりしてよりよいものを目指す子

子どもたちが自由な発想の即興的な動きを大切にしながら、表現する題材に対して課題意識を持ち、友達と協力し、アイデアを出し合ったり、タブレットで記録したりしながら自分たちの動きを見て、自分なりの「表したい感じ」を表現したり、修正したりする子どもの姿を期待したい。そして、何よりも表現運動を楽しみ、達成感や満足感を味わう子どもの姿を目指していきたい。

４【実践の内容・方法】

（１）実践の対象

対象領域	Ｆ　表現運動（６年生）
対象児童	令和５年度　Ｕ市立Ｈ小学校　６年生 21 名（男子９名、女子 12 名） グループ編成　５グループ
分析方法	・全体と抽出グループの発話や行動の考察【授業記録、ビデオ映像、教師の見取り】 ・児童の振り返りの内容や作文の記述から【振り返りシート・作文】 ・事前、事後アンケートの結果（数値）【アンケート】

（２）単元構成

単元名「魅せる・伝える・はあとの思い♡ー表現ー」全５時間（６年生）

次	時数	学習活動		学習課題
1	（1） （2）	・ペアゲーム ・ジェスチャーゲーム ※２次以降も帯で行っていく	・ロボットに変身 ・花火を表現しよう	◎友達と表現運動を楽しもう！ ◎リズムに合わせて表現をしてみよう！
2	（3） （4）		・お題に対して表現を考える ・相手に伝わる表現を考えよう	◎「はじめーなかーおわり」を考えて表現しよう！ ◎相手に伝わる表現を考えよう！
3	（5）		・発表会をしよう	◎ひと流れの動きを相手に伝えよう！

（３）具体的な手立て

①子どもが意欲をもち、学習をつなげる教科横断的な単元構成　手立て１

社会科の学習で、障害のあるなしに関わらず住みやすい社会をつくっていくことの大切さを学習する際、実際に耳の聞こえない方に講師として来ていただいた。手話だけでなく、身振りや手振り、ジェスチャー、表情など、身体全体を使って表現することの大切さを教えていただき、子どもたちは、声に出せる言葉だけではない表現方法について改めて考えることができた。そこで、単元のゴールとして、講師として来ていただいた耳の聞こえない方に、自分たちで作り上げた表現を見てもらう機会を設定する。実際に耳の聞こえない方に伝えるという相手意識をもたせることで、意欲的に課題に向き合い、自然と全身を使った大きな表現となり、高学年特有の恥ずかしさも払拭できるのではないかと考える。

また、発表会へ向けての学習活動は、「はじめーなかーおわり」を意識させて表現を作っていくことができるよう、学習指導要領の例示を参考に、自然の様子や自然現象を表現の題材として取り上げることとする。毎時間お題を変えることで、子どもたちは飽きることなく、即興的な表現を大切にして動くことができると考えた。

②友達と話し合い、動きを発展させたり、学びを実感させたりするための教具（ＩＣＴ機器）や場の工夫　手立て２

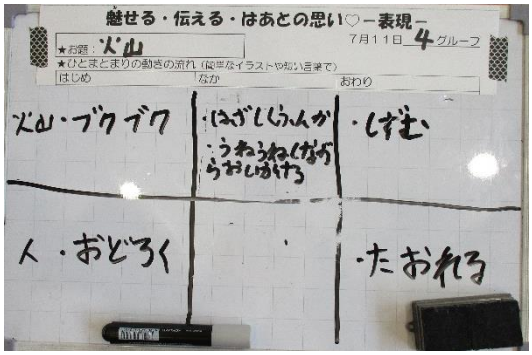

図１. 枠ありのホワイトボード

自分たちの動きを視覚的に捉え発展させるために、動きを振り返る機会が必要不可欠であるため、ＩＣＴ機器のタブレットや大型モニターを活用しながら運動に取り組ませる。自分たちの動きの様子を映像に記録し、その場ですぐに確認することで、以前の動きや友達の動きを確認しながら、意識して運動に取り組むことができると考える。また、「はじめーなかーおわり」を考える際、お題からだけだと話し合いが進まない可能性があるため、枠を用意したホワイトボード（図１）を用意したり、各班種類の異なる、お題である「火山の噴火」の資料映像をタブレットに入れておき、子どもたちがいつでも確認したりすることができるようにしておく。こうすることで、各班がそれぞれ種類の異なる映像を確認しながら、「こんな風に動くといいかな」と子どもたちが考えを広げる手立てとする。そして、村田（2002）の提唱する４つのくずしを参考に、よりよい表現を目指していくため、授業内で教師が見取った「よりよい動き」は教師の言葉や賞賛により価値付けし、次時の授業の最初に全体でよりよい動きを確認する時間（図２）をとる。こうすることで、子どもたちの中から良さを引き出し、自然とよりよい動きを意識しながら、活動に取り組むことができると考える。

図２. 動きの価値付け

授業の終末にはグーグルクラスルームを活用し、スプレッドシートに振り返りを記入させる。あらかじめ項目を設定し、プルダウンで選択できるようにすると、運動時間を確保しつつ、簡単に振り返りを行うことができる。また、ジャムボードには観点別の振り返りシートをグループごとに作成する。グループの友達同士見合いながら振り返りを行うことができるので、友達と関わり合いながら授業を振り返る姿を期待したい。

５【結果と考察】

(１)社会科での学習をつなげる教科横断的な単元構成

単元の終末には耳の聞こえない方から実際の表現運動を見ていただくことができた。以前その方からお聞きした、耳の聞こえない人と会話する際は手話だけでなく、身振りや手振り、ジェスチャー、表情など、身体全体を使って表現することが大切だということを思い出しながら、どうすると相手に伝わる表現になるか、試行錯誤する姿があった。発表会では各グループの表現をクイズのように発表させた。耳の聞こえない方や、友達がその表現を見て当ててくれたことに喜びを感じた子が多くいたことから、クイズ形式の表現発表は子どもたちが意欲的に活動に取り組むことができたものと考える。発表後の振り返りから、「みんなの前という緊張感や恥ずかしさがあったけど、楽しさが勝って、緊張感や恥ずかしさは無くなりました。」「みんなとやっていく内に楽しくて恥ずかしいという気持ちはあまり無くなりました。」と、他者意識をもたせて表現運動を行わせることで、楽しさを感じるだけでなく、恥ずかしさも払拭できた児童が多くいたことが分かった。(資料２)

(２)友達と話すことで高まる動き・ＩＣＴを使った動きの修正の有効性

単元を通して、どのグループもお題に対して友達とどんな風に協力しながら表現すると相手に伝えることができるか話し合い、実際に表現したものを動画に撮り、さらに修正していく姿が見られた。単元最初の表現と、最後の表現を比較すると、動きのバリエーションが増えている班が見られた。よりよい動きを価値付け、教師が声掛けしていったり、友達と話し合ったりすることで、力を高めることができたといえる。また、子どもたちに課題意識をもたせるという点に関しては、抽出グループの火山の噴火の表現と話し合いの様子から、課題意識をもち表現を考えることができたといえる。

図３. 話し合い前の火山の噴火

≪抽出グループの動きを修正する様子≫

① 表現を考える際、A児の「山は二人で手を繋げばいいんじゃない」という発言から、グループの内二人が手を繋ぎ、山を表現し、他の子がその山の中からジャンプして跳びだすことで火山の噴火を表現していた。(図３)

② 自分たちの映像を見た後、動きの修正の話し合いが行われた。
　B児:「最後どうする？（ジャンプするのを）やったら全員入る？」
　C児:「いいよいいよ、全員入ろう！」

③ 修正後の表現では、最後に全員が山の中に入り、山を表現していた二人も爆発し、大きな噴火を表現していた。(図４)

図４. 話し合い後の火山の噴火

子どもたちの振り返り作文からも、「アイデアを出し合い協力できたなと思いました。」「○○君が順番に跳べばいいんじゃないと、とてもいいアイデアを出してくれたのでとてもいい表現運動ができました。」と友達と話し合うことでよりよい表現運動に近づいたことを見取ることができた。ただ、「最初は意見がまとまらなかったけど、少しずつ意見がまとまっていったので良かったです。」「皆意見がバラバラで、作るのにすごく苦戦しました。」と、表現することを揃えようとした結果、話し合いがうまくまとまらないグループもあった。(資料３) スプレッドシートや、ジャムボードを使った振り返り（図５・資料４）を行ったことで、友達と関わり合いながら振り返りを行うことができた。ジャムボードを使った

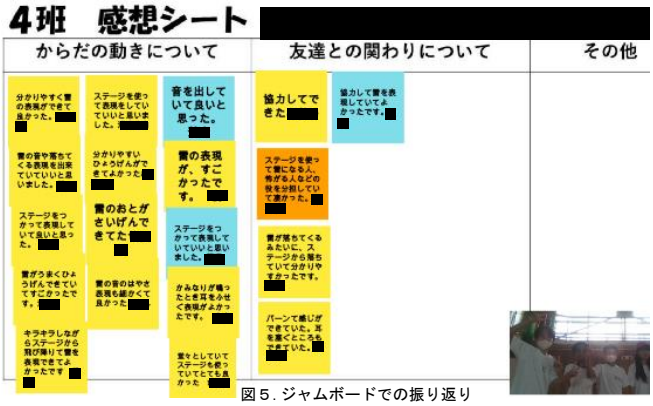

図５. ジャムボードでの振り返り

振り返りでは、からだの動き、友達との関わり、その他と項目を分け、自由に記述させた。自分たちの表現はどうだったか振り返る子や、友達のグループのページにその表現がどうだったか感想を記入する子など、様々な振り返りがあった。振り返り作文には、「みんなの感想を見た時、嬉しい言葉がたくさんあって嬉しかったです。」「(海について）波をうまく表現していて良かったという感想があって嬉しかったです」と、自分たちの表現について感想をもらうことで、喜びを感じたり、次への意欲を高めたりしている気持ちを感じとることができた。

(３)楽しいと感じさせることのできた表現運動

体育としての楽しさを感じさせることの難しさ、恥ずかしさの払拭など様々な課題があったが、多くの子が単元後の振り返りアンケートでは、楽しかったと回答していた（表２）。単元前のアンケートで、表現が好きではない／あまり好きではないと答えていた６名の内１名を除いて、楽しかった／普通と肯定的に回答していた。肯定的な回答に変化した子の理由には、「授業をやっていくにつれて段々楽しくなってきたから」「みんなと協力して表現運動をできたから、最初は少し恥ずかしかったけどやっていくにつれて恥ずかしくなくなった。」とあり、友達と一緒に動きを考え、授業の回数を重ねるうちに恥ずかしさを払拭できたことが分かった。また、恥ずかしさを払拭できた理由の一つとして考えられるのが、ジャムボードを使った振り返りである。「ぐるぐる回ったり動きもそろっていて協力していて凄かった」「海の波みたいな表現が上手く、よかった。」「海草を表現する時に交互に動いていていいと思ました。」と、自分たちの表現について他のグループからも感想をもらうことで、教師が価値付けするだけではなく、友達からの価値付けも行うことができた。その結果、表現することに自信がつき、恥ずかしさを払拭できたものと考える。

２０／２１名

	とても楽しい／好き	楽しい／好き	普通	あまり楽しくない／あまり好きではない	楽しくない／好きではない
表現は楽しかったか	6名 30%	6名 30%	6名 30%	2名 10%	0名 0%
以前より好きになったか	3名 15%	5名 25%	11名 55%	1名 5%	0名 0%

表２. 単元後のアンケート結果

６【成果と課題】

(1)　成果

①子どもたちの実態や単元のゴールをしっかりと見据えたり、導入で気持ちと身体を整える準備運動を行ったり、題材に対して話しやすくするために、枠ありのホワイトボードや資料映像などを用いることで、多くの子どもたちが課題に向かって主体的に運動することができた。また、子どもたちの振り返り作文の記述（資料３）や、事後アンケートの結果（資料５）から、「楽しかった」という記述を読み取ることができたことから、結果的に、子どもたちが楽しいと感じることのできる体育授業にすることができた。

②教科横断的なカリキュラムマネジメントを組み、ＩＣＴ機器を活用させることで、子どもたちは主体的に、楽しみながら運動に取り組むことができた。グループの友達と題材に対する動きのイメージを伝え合い、映像に撮ったものを修正する姿が随所で見られたことは、タブレットを活用したことで、表現運動における「学びに向かう力、人間性等」の目標に近づけたものと考える。

③ＩＣＴ機器を活用し、振り返り活動を充実させた結果、自分たちの表現について振り返り、次時へつなげることができた。また、友達から自分たちの表現について感想をもらうことで、喜びを感じたり、次への意欲を高めたりすることができた。

(2)　課題

子どもたちが主体的に運動に取り組む姿は随所で見られたが、その動きが「よりよい動き」なのか、しっかりと見極めて、動きを発展させたり、高めたりさせる必要性があった。子どもたちが考え出した動きを認めつつ、よりよい動きに近づくための指導、助言が必要不可欠であった。今後は、子どもたちの即興的な動きや、題材に対する動きのイメージを引き出しながら、よりよい動きを目指すための発問や、運動量を確保しつつ、子どもたちが話し合える時間のバランスをとることなどを大切に、指導を重ねていきたい。

７【参考・引用文献等】

・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説　体育編』東洋館出版社　2017
・国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　小学校体育　東洋館出版社　2020
・全国ダンス・表現運動授業研究会『みんなでトライ！表現運動の授業』大修館書店　2015
・村田芳子　『最新　楽しいリズムダンス・現代的なリズムのダンス』　小学館　2002
・茨城県教育委員会　学校体育指導資料第３５集「指導にすぐ生かせるワンポイント事例集（その３）」
『Ⅰ　表現運動・ダンスの場や練習方法の工夫』